

教師の資質と「落合ドラゴンズが愛されなかった理由」

教育者の大切な資質の一つに、「他人（生徒）のファインプレーを見つけて喜べるか」があると思う。時には生徒本人さえ気づいていない美点を見つけて、大きく取り上げ育てる。ただこれだけだが、芸能人の私事を暴く芸能レポーターでなくても、他人のあらを探るのが人間の性なので、案外難しい。また、「他人の不幸は蜜の味」ではなく、「生徒の幸福は蜜の味」とならなければ、教師のやりがいも生まれない。

さて、学校を舞台にしたドラマや映画は数知れないが、好きな一つが「愛と青春の旅立ち」（1982年公開の米映画）。主人公は不幸な生い立ちと決別するため、海軍士官学校での厳しい訓練とさまざまな困難を乗り越えようとするが、脱落者が次から次に出るくらい鬼軍曹のしごきは半端ない。ところが、最後の卒業式の場面で、士官になり立場（軍隊の位）が逆転した主人公に、軍曹は上官に接する態度で敬礼する。互いに言葉は交わしません、軍曹（先生）の主人公（生徒）への祝福と主人公の軍曹への感謝があふれる瞬間に、おのずと目頭が熱くなります。主人公のファインプレーに対する、軍曹の敬意の気持ちが描かれているわけです。

ところが、日々の教育現場では、「士官候補生が士官になる」ような分かりやすいことは実にまれ。生徒たちの成長や教育の成果が我々の喜びだとしても、何を持って成長や成果と見るかは、やはり難しい。また、合理性や目的を追求する経済活動と違い、成長や成果だけを求めることは、教育活動においては正しいとも言い切れない。ずいぶん昔になるが、南極越冬隊員が日本に戻って、「ガラスのコップでウィスキーが飲めるくらい嬉しいことはない」と語っていたのを読んだことがある。南極では食器は全て割れにくい画一的なプラスチック製だったわけで、これが合理性というものである。ただ、我々には合理的には説明がつかない、プラスチックのコップとガラスのコップでは同じ物でも味が変わるという感覚が存在する。我々が合理性だけを求めないエピソードをもう一つ。2004年からの8年間、セリーグの覇者として君臨した中日ドラゴンズ。監督だった落合博満氏は「打つことは良くて三割だ。でも、守りは十割を目指せる。勝つためにはいかに点をやらないかだ」と考え、「野手より投手を集め、打てる者より守れる者をゲームに送り出す。そうした合理性の追求は勝利の確率を高めたが、同時に落合の野球が『つまらない』と言われる要因にもなっていた」（2021年発行の鈴木忠平「嫌われた監督」より。また、昨今のピッチロック導入など、大リーグの「合理化」見直しもご存じのとおり）

話を教育に戻すと、根本的に「学び」自体が合理性となじまない部分があるのではないだろうか。人類初の抗生物質ペニシリンは、研究者がずぼらな性格で、細菌の培養皿を洗わずに窓のそばに放置したままで青カビを生やしたことをきっかけに発見されたのは有名な話。学びも「すぐに」「目に見えて」とか「役に立つ」「自己を高める」とかの合理性や目的だけを重視することはできないわけである。つけ足しますが、食事を取るのは栄養補給のためだけではありませんよね。食事にはおいしいとか、楽しいがあるわけで、栄養補給だけができればいいという人がいれば、「サプリメントを毎食、噛まずに100錠飲んで！」と叫びたいくらいです。（失礼しました。）学びも食事のように楽しんでもらえればいいと思いますし、時には寄り道することも大切ですよね。

令和5年7月3日 大村城南高等学校長 中小路尚也